

日本炭田図 XIV, 天草炭田地質図

一熊本県天草炭田の地質及び石炭鉱床一

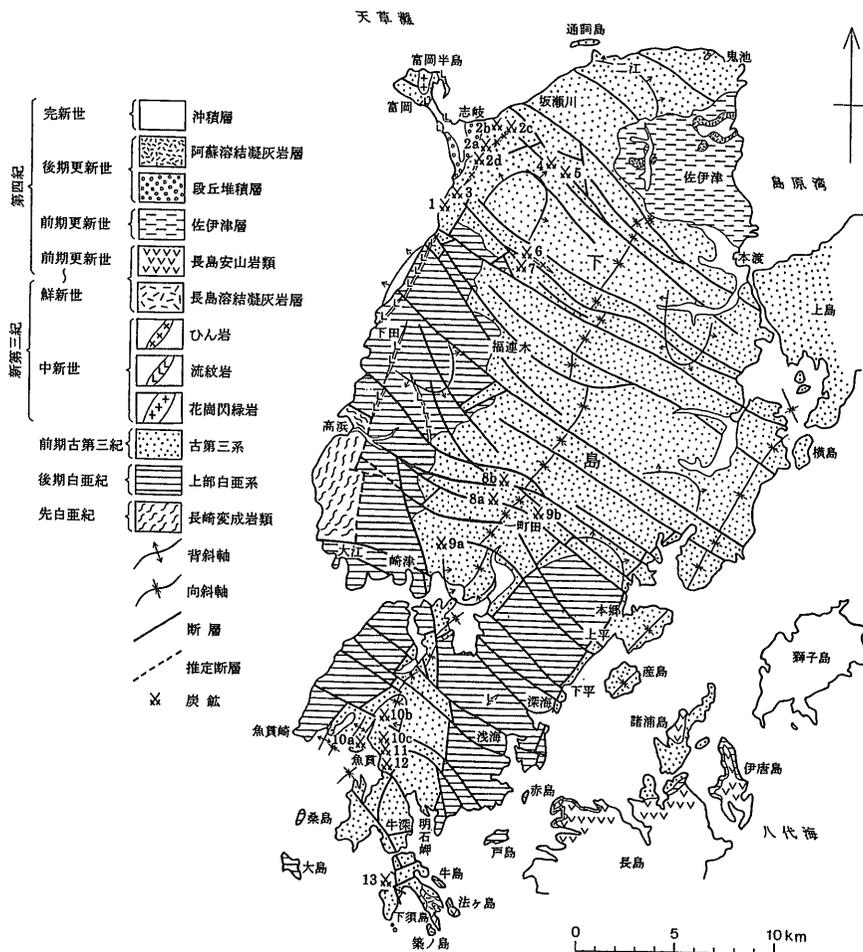
高井 保明¹⁾・坊城 俊厚²⁾・原田 種成³⁾

天草炭田は天草下島にある。この地域の地質は古い時代から順に、概略として次のもので構成されている(第1図)。

- (1) 白亜紀以前の長崎変成岩類。
- (2) この変成岩と断層関係にある上部白亜紀姫浦

層群の礫岩・砂岩及びシルト岩の互層する厚さ3,700m以上の地層。

- (3) それらに不整合に重なる古第三紀下島層群・坂瀬川層群の礫岩・砂岩・シルト岩・頁岩が互層する厚さ3,400~3,800mの地層(下島層群



第1図 天草炭田地域の地質略図

1) 元地質調査所 九州出張所, 故人
 2) (株)立地テクノロジー機構, 元地質調査所 燃料部
 3) 元地質調査所 九州出張所

キーワード: 天草炭田, 熊本県, 石炭, 無煙炭, 古第三紀, 礫石層

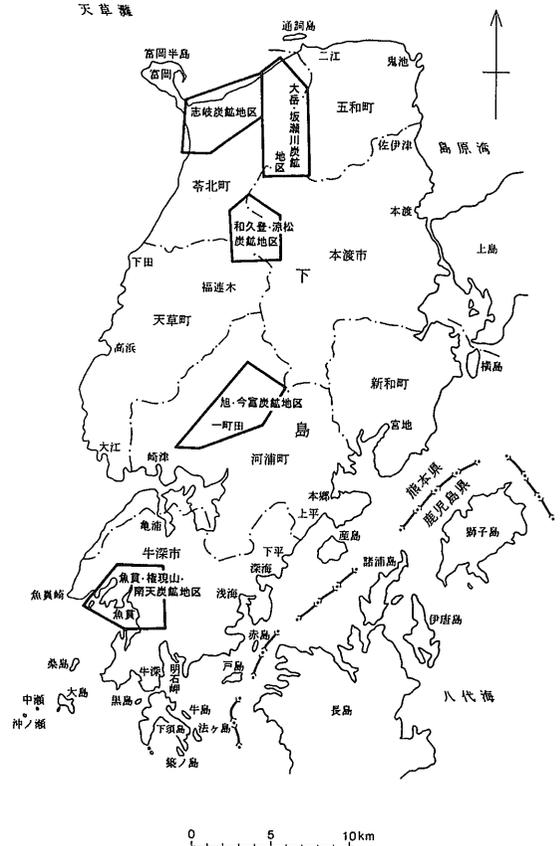
砥石層上部に厚さ0.3～1.5mの石炭層を2層挟む).

- (4) これらの地層を貫く新第三紀中新世の流紋岩・ひん岩・玄武岩及び花崗閃緑岩などからなる脈状の火成岩.
- (5) それらと不整合関係にある第四紀更新世の佐伊津層・釜層・阿蘇溶結凝灰岩・段丘堆積物と完新世の砂丘・沖積層.

石炭は享和(1801～03)年間に発見され、明治以前から採掘された。最盛期の1950年代には志岐、大岳・坂瀬川、和久登・涼松、旭・今富、魚貫・権現山・南天の各地区で約20ヵ所の炭鉱が稼行していた(第2図)。しかしこれらは1975年までにすべて閉山した。この地域の埋蔵炭量は約1,066万トンあり、1956年度以降に採掘された炭量は約450万トン、未採掘炭量は約600万トンである。

石炭の発熱量は6,500～7,700kcal/kgで「天草無煙炭」の名で知られている。地元では「キラ炭」と呼ばれているが、貫入した岩脈の熱変成作用を受けてコークス状になっているものは「瓦ケ炭」と呼ばれる(第3図)。

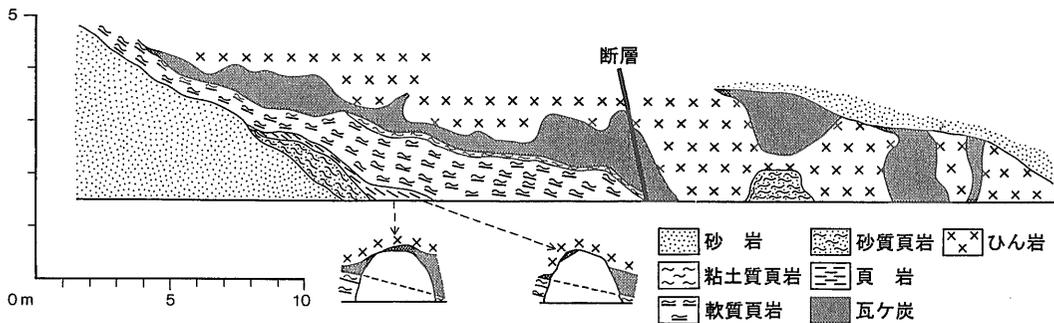
なおこの研究報告書は、1981年4月に当時の九州出張所から原稿が提出されたものの、1982年1月に筆頭著者が死去するなど、いくつかの予期せぬ不幸な事情が重なったため出版されないままになっていた。しかし下島の中部から北部にかけての地域は、7万5千分の1「天草」(1930)及び「口之津」(1936)の地質図幅があるために、5万分の1地質図幅の「空白域」となっている。したがってこのほど刊行された天草炭田地質図(5万分の1)は、



第2図 天草炭田の炭鉱地区分布。

単に石炭鉱床の産出状況を記載するだけでなく、下島地域の防災・環境保全・開発などに必要な地質情報を提供し、地域社会に貢献する基礎資料となろう。

(地質調査所 資源エネルギー地質部 吉井守正)



第3図 志岐炭鉱大久保坑で見られた石炭層とひん岩の貫入関係。垂直方向は水平方向の2倍に誇張。